原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第二百二十号

原告団レポート

CO患者――徳永恩さん

昭和35年の春。三池闘争中、長溝社宅の闘争本部の裏で。（後列、左から5番目が徳永さん）

のどかな村

国道二〇八号線を久留米にむかって北上すると、大牟田市と高田町との境、左側に西鉄電車渡瀬駅がある。

その改札口の横にある踏切りを渡ると、道は急に広くなって西へ、のびている。ハウスのイチゴはさかりらしく、籠にいれて畦を出てくる農婦に会う。遠くはかすみ、春めいた田畑に燕を見た。

「私が生まれた家は、ここから少し先にあります。四、五歳の時に親父が家をつくり移ってきました。そのころ家はここだけでして、道路も前の小さな道が、銀水にぬけているだけでした」

徳永恩（めぐみ）さん（昭和四年二月二十一日生まれ）の家は、新しくできた広い道から、いちだんと高い所にあり、広い庭には、手入れのゆきとどいた見事な盆栽がならび、梅が咲き、木瓜（ボケ）の赤い花が満開だった。

「倉永小学校から銀水高等小学校へ、それから大牟田工業を卒業し、昭和二十一年七月本所建築課に入りました。」

最初はトビ職の仕事だったが、社宅の基礎作りの仕事に移った。

昭和二十六年、大工となり、三池闘争前は、左官の仕事をするようになった。

闘いの前線

「三池闘争中は、ここの外来分会も組合員が多く交流していました。ストライキ中は長溝社宅の空屋を集会所にしまして、そこからホッパーをはじめ、あちこちのピケに出かけました」

闘争が終わり就労をはじめると、切り崩しが激しくなった。

社宅よりも、外来がやりやすいと知っている会社、職制は執拗に来た。外来分会も一人ずつ切り崩されていった。徳永さんにも、爆発で罹災するまでつづいた。

広い自宅の庭には植木、盆栽がいっぱい。手入れに精出す徳永さん。

今こそ災害の責任を

坑内へ配転されて二年目に被災

定年になったら仲間と集まって…

「私は男四人、女二人の弟妹の長男です。一番下の弟が高校を卒業して、三井アルミに就職がきまっていたのに、兄貴が第一組合だから駄目だと断わってきました。

悔しくてなりませんでした。私の息子や娘なら、第一組合の子供だからということになるかもしれませんが、三井という会社は親族までも差別するという、実に汚ない会社ですね」

闘争後、合理化が相つぎ、本所建築課の廃止、売店の第二会社化などで、四山鉱、三川鉱への配転が強行された。

「坑内に下がると言った時は、ずいぶん反対したのですけど」と、そばで奥さんの寿子さん（昭和十年三月二十三日生まれ）が言う。

「職場のみんなが、坑内に下がると言っているのに、自分だけ別の所にとは、なかなか言えないですよ。まさか、二年後に大災害が発生して、こんな目にあうとは夢にも思っていませんでしたから」

昭和三十六年十一月九日、徳永さんは三川鉱仕繰工となった。

被災の翌年、2日の外泊をもらって地域の仲間たちと一泊旅行。家族とともに。

廊下の隅で

「何回もテレビのニュースでいっていたそうですが、妹婿が来るまで全然知りませんでした。それに、今日は組合で役員会議をするから遅くなる、といって出ていましたので、気にかけずにいたのです」

「夜八時ごろ、妹婿が来まして、三川鉱で爆発があったといっているが、兄貴は帰ってきているのかと、心配して言うので驚きました。父と妹婿と私は明美（昭和三十七年十月三十日生まれ）を背負って、車で三川鉱へ行きました」

寿子さんは、当時のことを思いおこし、怒りを新たにする。

「三川鉱は、ごった返していました。天領病院から会社の体育館へ行きました。常一番だから駄目かもしれないと思い、安置されている棺を、ひとつひとつあけてみました」

体育館には徳永さんの姿はなかった。寿子さんたちは、再び天領病院に引き返した。

「病室はもとより廊下まで人があふれ、昇坑した人達はゴザをひいて、寝かされていました。寒い夜でしたから、みんな毛布にくるまって寝ています。その中にいたのです。あの時の気持ちはなんとも言えません」

病院から、一応つれて帰ってくれと言われ、恩さんを自宅に運んだ。頭痛がひどく、四日ほどして天領病院に入院した。

記録によると、三百五十メートル坑道で倒れているのを、担送されている。

「私には、どこで気を失ったのかまったく記憶がないんです」

「いつでしたか天領病院で、当時の係員に会った時、あんたは私がこっちに来いと言ったのに、反対の方向へどんどん行ってしまったと言うのです。そんな記憶もないんですね」

「天領病院からつれてかえる時、『あっ、この人は俺が四山鉱から上げた』という人がいました。あの時、名前を聞いておけばと、今も思っています」

寿子さんは、やはり気が動転していたにちがいない。

狂った人生

徳永さんと寿子さんは、昭和三十年十一月二十六日に結婚し、長男正悟さん（昭和三十二年一月二十四日生まれ）、二男巧さん（昭和三十四年八月十日生まれ）がいる。爆発の時は、明美さんが一歳になったばかりだった。

「今でも夜はよく眠れないんです。数字を何回も口にしながら眠るようにしています。それと頭痛がとれないのです。天候が悪い時はひどいです。薬も飲むのですが、かわりません」

徳永さんは天領病院から労災病院に移った。

寿子さんは、明美さんが二歳半になると仕事にでた。

「今は事務の仕事をしていますが、初めは外の仕事で大変でした」

収入は半減し、両親、子供三人をかかえ、徳永さんの仕事まで寿子さんの肩にかかってきた。

「一番こたえたのは、昭和四十三年三月、肝臓を悪くして曙病院に四カ月ほど入院しました。私傷でしたから、安い賃金が半分になり、やりくりもきかない状態になりました」

寿子さんは、一家の柱をCO患者にされ、本人の一生を含めて、家族にまで犠牲をしいてくる会社の不誠意さを責める。

両親も健在

「子供たちも大きくなりまして、ひと安心というところです。長男は建設会社に就職し北海道勤務でしたが、鹿児島に転勤してきましたので助かります。下のも福岡にいたのですが、労働条件が悪くて、二年ほどいたのですが帰ってきて市内で仕事をしています」

明美さんも、今年成人式をむかえて、就職も久留米にきまった。

父、喜次郎さん七十九歳、母、フクさん七十六歳。両親とも健在である。天候のよい日は、マイペースで畑仕事をする。

「私たちは、なにも言いません。自分たちのペースでやるのが、いちばんいいことだと思います」

徳永さんも父親ゆずりで盆栽をする。見事な松の盆栽が玄関の両脇にずらりとならぶ。時期になると、手入れが忙しいという。

「ソフトボールもやるんですよ。建築時代からやっていましたし、倉永は公民館対抗が盛んで、私も参加しています」

団結する力

来年二月に定年退職を迎える。

「外来分会は、今は私一人でして、分会費も少しありますから、私の定年の時、すでに定年された仲間夫婦に集まってもらい、ここで集会をやろうと思ってます」

徳永さんは、長い苦しい炭鉱生活をふりかえり、みんなと話し合える日を楽しみにしている。

「合理化というのは、労働者の生命を犠牲にするということですよ。災害の責任を明らかにすることが、今は重要だと思います」

朝五時三十分に起床する。渡瀬駅まで歩き、電車で大牟田へ。大牟田駅から万田作業所まで、自転車で行く。このリズムもやがておわろうとしている。